

ぞうひら
蔵平遺跡

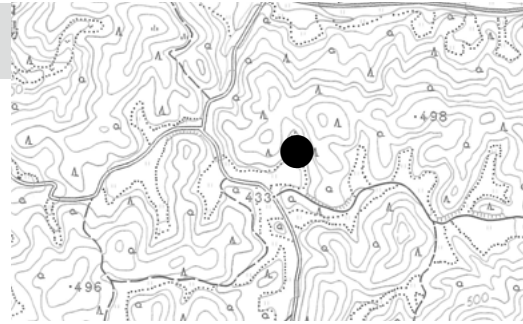
所在地 豊田市下山田代町蔵平地内
(北緯35度01分34秒 東経137度19分15秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業

調査期間 平成26年5月～平成26年9月

調査面積 2,400㎡

担当者 武部真木・町田義哉



調査地点 (1/2.5万「東大沼」)

調査の経過 調査は愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成26年5月から9月にかけて実施した。調査対象地の現況は旧水田耕作地と植林された山林であり、谷を挟んで14A区と14B区とに分けて調査を行った。両区を合わせた調査面積は2,400㎡である。

立地と環境 蔵平遺跡は郡界川の支流の一つである沖川の東岸丘陵部に所在し、南北に伸びる谷地形の東・西斜面に位置する。北側上流の谷斜面に和倉遺跡、尾根を挟んで東に孫石遺跡、更に谷を挟んで丸山A遺跡が存在しており、周辺には平安時代を中心とした遺跡群が展開している。

調査の概要 遺跡が所在する斜面は谷を挟んで西向き斜面(14A区)と東向き斜面(14B区)に分かれる。調査地点の標高はおよそ442～455m、斜面の平均斜度はそれぞれ14A区は約17°、14B区は約22°を測る。

調査の結果、主に14A区から縄文時代の遺物、平安時代の遺構や遺物、近代の炭焼窯が確認されている。

堆積層は斜面のため、一概には同一とは言えないかもしれないが、表土(腐葉土混)下の黄灰色土と少量の炭化物が混じり、しまりを欠く黄褐色土を平安時代の遺物包含層として捉え、その下のしまりのある黄褐色土層(地山)上面を検出面として、14A・B区共に1面調査を行なった。また、一部の竪穴状遺構上には黒褐色土が堆積しており、周辺の遺跡では下層で確認されている黒褐色土の再堆積である可能性がある。

以下、時期ごとに遺構・遺物の概要を報告する。

縄文時代 縄文時代の遺物としては、スクレイパー1点が西向き斜面のA区包含層から、出土しているに過ぎない。遺構としては捉えられるものは確認されなかった。

平安時代 14A区からは、竪穴状遺構10基、カマド・炉跡15基の他に、それらに伴う柱穴や土坑、溝などの遺構が多数確認された。

竪穴状遺構は斜面を切り出して平坦面が造られており、一辺が2～3mと小規模なものが多いが、標高454m付近に位置する最大規模の009SXは3基の炉跡、6基の柱穴、2基の土坑を伴い、長辺は約7.5mを測る。また山側の壁面に沿って小柱穴3基を伴う、長さ約3mの溝を確認した。標高452mに位置する石組みカマドを伴う小規模な024SXは、ほとんどの竪穴状遺構が現況において斜面の山側にしか掘り方がないのに対して、谷側にも掘り方が確認された。標高446～448m付近に造り出された平坦面には、竪穴状遺構が弧状に連なって南北に展開しており、そこだけで8基の炉跡が確認されている。最下段、標高442m付近に位置する122SKは他の竪穴状遺構とは違い炉跡や溝を伴わないが炭化材が検出さ

れ、焼失竪穴建物の可能性がある。

明確なカマドは石組みのものが1基確認されたのみだが、009SXの山側東壁に近接する034SLは壁際に煙道のような被熱部分があり、カマドであった可能性も考えられる。また、弧状平坦面の一角、166SX内の石組みがわずかに残る045SLは壁から離れた位置にあり、石組みの炉であった可能性もある。

竪穴状遺構の大半は規模が小さく、カマド・炉の配置からも長期居住には適さないかもしれない。季節限定の作業場として機能していた可能性も検討しなければならないだろう。

遺物に関しては、竪穴状遺構や包含層から多数の灰釉陶器が出土している。そのうち、墨書を有する碗、皿合わせて12点以上、ほかに緑釉陶器碗1点も出土している。また、それ以外に18点に及ぶ土錘が出土している。大半が谷に近い標高の低い位置からではなく、斜面の比較的高い所から出土しているのが興味深い。本遺跡においては炉跡周辺を含めて、鍛冶滓などの鍛冶関連遺物の出土は極めて少なかったが、急斜面であることを合わせて考えると一概に関連遺構はなかったとは言い切れないかもしれない。

近代 近代では炭焼窯が確認されている。本遺跡では炭焼窯は壁面に被熱を受けて赤変した部分が残るが円形土坑のタイプと平面形が涙滴形を呈する焚口と煙道を持つタイプが確認された。007SYは石材を組んで造られた焚口をと煙道を持ち、窯体内には天井壁が崩落し、焚口前方は約3m×約5mの平坦な作業スペースに整地され、灰原が広がっていた。

まとめ 今回の調査では、平安時代の竪穴状遺構が数多く確認されたが、その規模、配置、立地条件などから、定住していたとは考えにくい。墨書の灰釉陶器の出土量の多さから、どのような勢力が介在していたのかを検討する必要があるだろう。また、これまで余り着目されていなかった山間部の急斜面に数多くの遺構が確認されたことの意義も大きい。今後は近在する遺跡群と比較して、この地域全体の様相を把握し、蔵平遺跡の担う役割を考えていかねばならないだろう。

(町田義哉)



蔵平遺跡 調査区遠景 (南から、手前：蔵平遺跡、奥：和倉遺跡)

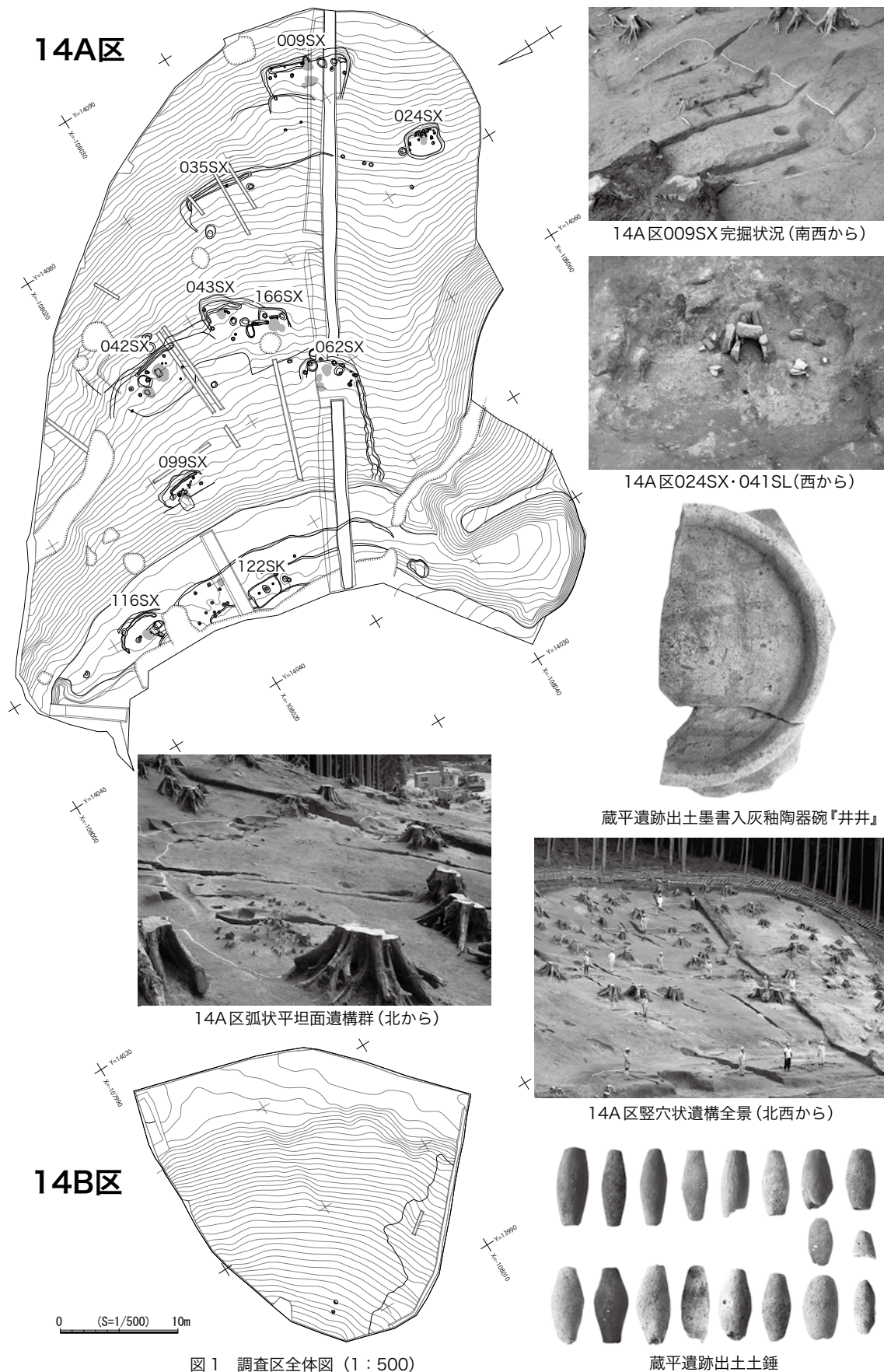


図1 調査区全体図(1:500)